

# ニュータウンにおける祭礼運営組織の「新たな」試みとその背景 「山の寺秋葉神社どんと祭」の事例から

著者	高橋 嘉代
雑誌名	論集
巻	42
発行年	2015-12-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00130336">http://hdl.handle.net/10097/00130336</a>

# ニュータウンにおける祭礼運営組織の 「新たな」試みとその背景

—「山の寺秋葉神社どんと祭」の事例から

高 橋 嘉 代

## 1. 問題の所在

本稿の課題は、町内会等の地域コミュニティによって主催・運営される祭礼における、対立・葛藤状態の防止および解消がいかにして目指されているか明らかにすることである。この問題意識のもと、本稿において焦点を据えたのは宮城県仙台市にて開催されている「どんと祭」の事例である。仙台市および近郊で1月14日から15日にかけて正月飾りを焼却する小正月行事として開催される「どんと祭」の現代的な様態については未だ分析の余地が残されている。そこで執筆者は、いわゆる「新しい伝統行事」成立プロセスとその継続を支える当事者たちの試み、その試みを支える論理を明らかにすることを究極的な目標として、市内で開催されている総てのどんと祭を概観するとともに、仙台市内のニュータウンにおいて開催されるどんと祭に対する事例調査を続けてきた。本稿で分析対象とする事例もこの一連の調査に基づいている。

地域社会の中で実施される各種の祭礼については、当該の地域社会を構成する住民や各種集団・組織間における親睦・交流の機能を当該の地域社会において果たしてきているとの指摘が、これまで多くの論者によってなされてきた。とはいえ住民のライフスタイルが多様化している現代の地域社会において、祭礼を実施するにあたっては特に、大小様々の対立・葛藤の発生があるであろうことは想像に難くない。そこで本稿では、仙台市内のニュータウンおよびその近隣において住民が主体となって開催・運営されている「どんと祭」の事例に焦点を据え、祭の場が如何なる論理で構成されるに至っているのかを分析した。

## 2. 仙台市における「どんと祭」概要

主に小正月に行われる火祭りである「左義長」は、様々な呼称・形式におい

てわが国の各地で行われている習俗である。宮城県仙台市およびその近郊においてこの火祭りは多く「どんと祭」と呼ばれ、多く1月14日から15日にかけて寺社などを会場として開催されている。本稿で採り上げるのは仙台市内で開催される事例であるため、以後は仙台市内および近郊で開催される左義長の総称として「どんと祭」という呼称を用いる。

仙台市内においては近年では毎年140件前後のどんと祭開催が確認されている<sup>1</sup>。どんと祭開催にあたっては、仙台市火災予防条例（昭和48年3月27日条例第4号）第57条「火災とまぎらわしい煙等を発する行為等の届出」により、事前に所轄の消防署に「火災発生届出書」を提出しなければならない。どんと祭当日は仙台市消防局の六つの分署（青葉署、宮城署、宮城野署、若林署、太白署、泉署の6分署）がそれぞれ所轄地域の会場の警戒をおこなう。どんと祭の会場は市内のほぼ全域に分布しており、1月中旬に差し掛かると町内会の集会場や掲示板、小売店の店頭などにどんと祭開催案内の掲示物が市内の各地で確認される。

どんと祭は寺社の境内地において開催されることが多いが、公園や空き地などを用いて行われる例も散見される。どんと祭当日においては、会場内の所定の位置に持ち込まれた古い縁起物類が燃やされる。会場内に持ち込まれた縁起物類は所定の時刻—多くは夕刻である—に点火され、この点火をもってどんと祭の開始とされる。祭が始まった後にも会場への縁起物類の持ち込みは点火から数時間後の祭の終了時刻（消火時刻）に至るまで続く。

現在開催されているどんと祭は、一部を除いてはその多くが第二次世界大戦の後に新たに開催されるようになった祭である。特に仙台市内および近郊においてニュータウンの造成・分譲が進行した1970年代半ば以降は、ニュータウンの住民が中心となって運営し、公園や空き地などにおいて開催されるスタイルのどんと祭も現れるようになった。

どんと祭の規模や開催時間帯にはそれぞれ一定の地域差が確認される。地域差の例として顕著なのはどんと祭の開催日時であり、大部分のどんと祭が1月

---

1 仙台市消防局によると、2011（平成23）年1月のどんと祭実施件数は147件、2012年から2014年までの実施件数は137件、2015年の実施件数は138件であった。2012年に実施件数が減少しているのは東日本大震災による寺社および会場の被災・閉鎖によるものである。

14日の夕刻から深夜にかけて開催されているのに対し、仙台市青葉区西部の旧宮城郡宮城町に該当する地域においては1月15日の早朝・夕刻に数名から数十名程度というごく少数の来場者のなかで開催される例が比較的多い<sup>2</sup>。

一般にどんと祭は小正月の神事として扱われており、持ち込み物の点火の際には神職による修祓が行われる。常在の神職がいない神社や、公園や空き地等が会場となっているどんと祭では会場近隣の神社の神職が修祓をおこなう例もある。

仙台市内で開催されるどんと祭の中でも大崎八幡宮（青葉区八幡）における「松焚祭」は近世以来の伝承を持つとされ、市の無形民俗文化財にも指定されている。松焚祭においては毎年数万人から十数万人の来場者があり、JR仙台駅他主要駅からのシャトルバスが運行されるなど観光資源としても位置づけられている。松焚祭当日および前後の会場および周辺の様子については、松焚祭の他のどんと祭の模様とともに毎年地元のマスコミにおいて冬の風物詩のひとつとして採り上げられている。

現在のどんと祭においては、修練に一定以上の期間を要する芸能や、祭を象徴するような造り物は一般に付随していない。もっとも、松焚祭においては地元企業や学校の有志などによる「裸参り」が毎年行われており、これも松焚祭の見どころのひとつとして地元マスコミなどで紹介されている。しかし、大崎八幡宮以外の仙台市内のどんと祭会場では、必ずしもその総てで裸参りが行われているわけではない。裸参りの保存会が組織されており、毎年大勢の裸参りへの参加者・参加団体を集める松焚祭は、少なくともこの点に関してはむしろ例外的な特徴を持つと言える。

### 3. どんと祭についての議論・本稿の視角

#### (1) 祝祭／祭礼論からみたどんと祭の特徴

以上のような形で開催されているどんと祭だが、祝祭／祭礼論の視点から鑑みていくつかの興味深い特徴がある。

- 2 仙台市消防局によると、2015（平成27）年では1月15日を初日として（14日開催のどんと祭の継続として15日にも持ち込み物の焼却が継続していたということではなく）どんと祭を開催していた会場は12か所あった。該当する会場所在区からみた内訳は、宮城野区全28会場中2か所、太白区全27会場中1か所、旧宮城郡宮城町全22会場中9か所であった。

近代以降の仙台市および近郊のどんと祭の変容を地元紙におけるどんと祭関連記事から分析した安藤直子（2006）によると、戦後のどんと祭は、仙台市の都市化の進展と相前後してその分布の範囲を拡大させるとともにその性格を変化させていった。特にその変化が顕著に現れたのが昭和30年代である。高度経済成長とともに「新生活運動」が全国的に展開されたこの時期、小正月行事はノスタルジックな受け止められ方をするようになる一方、大崎八幡宮の松焚祭は仙台七夕祭り・青葉祭と並ぶ「仙台三大祭」の一つとして観光資源化・地域おこし資源化が進んだ。安藤は更に「昭和50年代を通じて、どんと祭を実施する進行団地の町内会が増加し、どんと祭は正月送りの神事から、住民の親睦・交流の場へとしての性格を強めてきた」（安藤2006：95）ことにも目を向け、仙台市内のどんと祭は不特定多数の都市住民を巻き込みながら、正月送りの神事から、観光資源化、企業や町内会の親睦・交流といった目的へと拡散してきたとする<sup>3</sup>。そしてどんと祭が仙台を代表する行事として認識され、定着してきたことは「多様な価値観を許容する緩やかさによるものであり、都市型の祭礼としてのどんと祭の特質がここに窺える」（安藤2006：100）と結論づけている。

ところで松平誠（1990）は、祭を「ミル」側と「スル」側、そして「ミせる」側との境界が曖昧であり、それぞれが容易にもう一方へと入れ替わるところに、都市祝祭の特徴を見た。ただし松平の議論で挙げられている都市の祝祭は、歌舞音曲や造り物、それも一定程度以上の修練および技能が求められる類のものが祭の構成要素として大きなウェイトを占めているタイプの祝祭が一応のところ念頭に置かれていると考えられる。したがって、現在の仙台市内で開催されているどんと祭について、松平の議論を直接的に当てはめるのには注意が必要であろう。

とはいえ、どんと祭においては、仮に歌舞音曲や造り物の類がないにしても、厳冬期の夜間から未明にかけて寺社の境内地で燃え盛る炎、炎を囲む人々、持

3 仙台市のどんと祭の特徴については、高橋嘉代（2010）も分析を試みている。高橋は、どんと祭会場の地理的分布と来場者数に注目し、松焚祭のような大規模で観光化した祭と、比較的規模が小さく、会場近隣の住民が主な来場者と考えられるどんと祭とに二極化する傾向にあり、それぞれ観光資源および縁起物類の「適切な」処分のための機能を擁するどんと祭と、縁起物類の処分の機能に特化したどんと祭という形で異なった機能を果たしている蓋然性を指摘している。

参した正月飾りや縁起物を火中に投ずる人々の姿それ自体が鑑賞の対象になっている蓋然性は否定できない。寒さの厳しい東北において、真冬の夜間に屋外で活動し、しかもそれが正月飾りや縁起物を限定的に焼却することであるという非日常体験である。正月飾りが燃やされてゆく有様を「ミ」つつ、自身もまた炎を囲み正月飾りを火中「スる」、その姿を他の来場者がまた「ミ」る…という形において、「ミる」側と「スる」側はいとも容易く相互転換する。この点でどんと祭もまた、松平が指摘するところの都市祝祭の特徴を持つものと言い得るだろう。

## (2) 本稿における問題意識と課題

先述したとおり、どんと祭においては一般に、一定以上の修練や技能を要する造り物および歌舞音曲は必須の要素とはされていない。言い換えれば、見せることを意識し、積極的にその出来栄えを競うような要素が比較的少ない祭である。したがって、どんと祭においては、歌舞音曲や造り物という形において望ましいとされる技能を一定のプロセスを経て身につけ、その出来栄えを競うことに伴う対立および葛藤状態に置かれる蓋然性は相対的に低いと考えられよう。

しかし、これはどんと祭のあらゆる場面において対立・葛藤が発生する余地が皆無であるということの意味するものではない。例えば、松焚祭の裸参りについてはその保存会が組織されているが、これは過去に実際に発生し、批判を集めてもいた参加者や団体における過度な商業主義・奇抜な装束や振る舞いなどを未然に防ごうとする動きの一つの結果とみることもできる。またどんと祭による煙やにおいの発生、用地確保が地域社会の課題とされることもある。どんと祭運営メンバーの確保、運営に関わる対立・葛藤状態の発生もまた散見され「多様な価値観を許容する緩やかさ」がどんと祭の存続をはかる動きとは逆の方向へと向かうことも起こりえる（高橋嘉代 2012）。

つまり、たとえ交流および親睦が目指されているにしても、そして現実交流・親睦に到達することができたとしても、どんと祭を行えば交流や親睦といった結果が自動的に・予定調和的についてくる訳ではない。常に発生している、あるいは発生し得る大小様々の葛藤を解消しながら、あるいは葛藤を包摂しながら、漸う年毎のどんと祭を継続できているのではないか。そのように理解する方が寧ろ妥当であるように思われる。

この点において、筆者のどんと祭理解は、有森尚央（2012）の祭礼論に近い立場をとるものである。岸和田だんじり祭の祭礼組織の構造およびその担い手のキャリアパスに注目した有森は、年齢階梯制によって成り立つ祭礼組織の構造を背景とした、個から集団、集団からさらに上位の集団へと準拠枠と組み替えながらの競争関係の再編に注目した。その中で集団の関係性は相互依存的なものでありながらもその関係自体にある種の緊張を孕むものである。ここに祭という社会現象を成り立たせる集団の本質があると筆者は考えるものである。もっとも有森の取り上げた例は、年齢階梯制の原理に基づいて構成される祭礼組織がある類型の祭である。更に言えば祭礼組織が重層的な構造をなしており、メンバーは町内祭礼組織とその連合体の祭礼組織とを往復するようなキャリアパスを描くことを通して祭の運営のために必要な諸能力を身につけてゆく構造があり、だんじり（とその曳行）という、祭において不可欠の造り物（およびそのパフォーマンス）が存在しているタイプの祭である。それと異なり、祭礼組織における年齢階梯制・造り物とそのパフォーマンスのどちらも明確な形では存在していないタイプの祭においては、また異なった形で祭のダイナミズムが生み出されてゆくと考えられる。

本稿で仙台市内のニュータウンで開催されているどんと祭、すなわち住民の交流および親睦を目指して実施されるものとして語られることの多いタイプのどんと祭に注目するのはこのような問題意識による。

#### 4. 調査対象概況

##### (1) 調査対象地域について

本稿の調査対象は仙台市泉区北部に位置する、向陽台・山の寺・明石南の3地区の住民によって開催されるどんと祭である

はじめにこれら3地区の概要を述べよう。向陽台・山の寺・明石南の3地区とも丘陵地の宅地開発によって成立したニュータウンである。向陽台・山の寺の2地区の開発は昭和40年代初期から、明石南地区の開発は平成初期から進められた。いずれの地域も同一の小学校および中学校の学区となっている。現在の3地区に該当する地域は宅地開発以前には国有林や集落の共有林となっていた山林であったため、現在のニュータウンの区域内には神社・仏閣はない。ただしニュータウンが造成されている丘陵の南西側の麓には曹洞宗の寺院である

U寺があり、U寺から更に1km程南には国道4号線仙台バイパスを隔てて愛宕神社がある。

向陽台・山の寺・赤石南の3地区の主要駅からの距離は、JR仙台駅からは15kmから20km、地下鉄泉中央駅から2kmから4km程度である。主要公共交通機関は路線バスであるが、平日の通勤および退勤時刻に合わせた時間帯に集中した運行となっているため、自家用車を持つ住民が多い。

同一の小学校および中学校の学区でありながら、この3地区の一世帯あたりの平均世帯員数および年齢別人口構成には違いが見られる。2015（平成27）年10月の「住民基本台帳」における世帯数および人口、一世帯あたりの平均世帯員数を表1に示した。造成・分譲時期が最も遅かった明石南地区の世帯数が3地区の中で最小である一方、この明石南地区の人口は向陽台地区に次いで多い。一世帯あたりの平均世帯員数は明石南地区が最多であり、山の寺地区が最小となっている。

3地区の特徴を年齢別人口構成から見てみよう。表2は同じく2015年10月の「住民基本台帳」から作成した3地区の年齢別人口とその割合を示したもので

表1 3地区世帯数・人口（2015年10月1日現在）

	世 帯 数 (世帯)	人 口 (人)	一世帯あたり平均世帯員数 (人)
明石南地区	1483	4362	2.9
向陽台地区	2331	5556	2.4
山の寺地区	1813	3939	2.2
三地区計	5627	13857	2.5

(住民基本台帳より筆者作成)

表2 3地区年齢別人口構成〔三区分〕（2015年10月1日現在）

	明石南地区		向陽台地区		山の寺地区	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
0-14歳	829	19.0	725	13.0	417	10.6
15-64歳	3021	69.3	3119	56.1	2260	57.4
65歳以上	512	11.7	1712	30.8	1262	32.0
計	4362	100.0	5556	100.0	3939	100.0

(「住民基本台帳」より筆者作成)



ある。向陽台地区と山の寺地区の高齢化率はいずれも30%を超えているのに対して、明石南地区の高齢化率は11.7%に留まる。更に年齢別人口構成を10歳階級で表してみると(表3), 向陽台地区および山の寺地区では40代の人口と50代・60代が占める割合がそれぞれ高いのに対して、明石南地区では40代の人口と20歳未満の人口が占める割合が高いことがわかる。向陽台地区および山の寺地区では40代とその親世代が高い割合を占める一方で40代の子供世代の占める割合が低いのに対して、明石南地区ではその逆の傾向、つまり現在の40代とその子供世代の占める割合が高く、40代の親世代が占める割合が低いということができよう。年齢別人口構成から見る限り、向陽台地区および山の寺地区と明石南地区とではほぼ一世代分のタイムラグはあるものの、いずれの地域においても子育て開始と相前後して(あるいは子供の成人前に)ニュータウンに住まいを求めた住民が少なからずあったであろうことが伺われる。

各地区の町丁ごとに町内会が組織されており、その上位組織として向陽台連合町内会・山の寺連合町内会・明石南連合町内会が組織されている。これら3連合町内会によって連絡協議会が構成されており、3地区合同で運営・開催す

表3 3地区年齢別人口構成〔10歳階級〕(2015年10月1日現在)

	明石南地区		向陽台地区		山の寺地区		3地区計	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
0-9歳	435	10.0	467	8.4	258	6.5	1160	8.4
10-19歳	767	17.6	533	9.6	355	9.0	1655	11.9
20-29歳	384	8.8	467	8.4	396	10.1	1247	9.0
30-39歳	430	9.9	641	11.5	504	12.8	1575	11.4
40-49歳	1020	23.4	844	15.2	547	13.9	2411	17.4
50-59歳	607	13.9	571	10.3	351	8.9	1529	11.0
60-69歳	391	9.0	734	13.2	630	16.0	1755	12.7
70-79歳	213	4.9	875	15.7	606	15.4	1694	12.2
80-89歳	100	2.3	359	6.5	249	6.3	708	5.1
90-99歳	15	0.3	62	1.1	43	1.1	120	0.9
100歳以上	0	0.0	3	0.1	0	0.0	3	0.0 <sup>※</sup>
計	4362	100.0	5556	100.0	3939	100.0	13857	100.0

(住民基本台帳より筆者作成)

※小数第3位以下を切り捨てて計算している。

る年中行事も複数ある。本稿で事例として注目する「山の寺秋葉神社どんと祭」もその一つである。

## (2) 山の寺秋葉神社どんと祭について

「山の寺秋葉神社どんと祭」とは、先述の3地区所在の丘陵地の麓に位置するU寺において開催されるどんと祭の名称である。このどんと祭は1975（昭和50）年1月に始まり、以後2015（平成27）年1月の第41回に至るまで毎年開催され続けている。

このどんと祭の名称は、U寺の通称「山の寺」と、U寺の敷地内に従前より祀られている秋葉神社によるものである。この秋葉神社には神職等は置かれておらず、古くからU寺の中にあつたものをU寺が管理している。

U寺の敷地にある神社の名前を冠し、U寺の境内地で毎年実施されるどんと祭であるのだが、向陽台・山の寺・明石南地区の住民によって組織されるどんと祭の運営組織が祭を主催している。U寺は会場の提供と修祓<sup>4</sup>を担うのみで、その他の運営の実務には携わっていない。U寺の檀家組織も、「U寺檀家」としての立場では祭の運営には携わらない。U寺に隣接するニュータウンの住民が主催し、実務を担うという運営スタイルは1975年開催の第1回から現在に至るまで変わらない。

2015（平成27）年の山の寺秋葉神社どんと祭は16時から始まり、20時に終了した。仙台市消防局の調査によると、この年の来場者（参拝者）数は延べ4500人である。なお、この年1000人以上の来場者（参拝者）があつた会場の割合は全体の28%程度であつたことから、山の寺秋葉神社どんと祭は仙台市内のどんと祭の中でもかなり来場者規模の大きい祭であることがわかる<sup>5</sup>。

どんと祭の運営組織が活動を始めるのは11月の下旬から12月上旬である。年内に数回、運営組織で翌年1月のどんと祭の準備に関する打ち合わせの会合が行われる。その後どんと祭当日までの間に、当日に使用する物品の準備や会場

4 実際には読経のスタイルが取られている。「修祓」の機会は2度あり、1度目は当日に会場で頒布する神符・破魔矢等の縁起物への「修祓」、2度目はどんと祭の点火式における「修祓」である。これらの「修祓」の際には般若心経、消災妙吉祥陀羅尼、大悲心陀羅尼、観音経等が読経される。

5 泉区においては、来場者数1000人以上の「大規模どんと祭」が占める割合が他地域と比べると概して高い。この背景として小久保（高橋）は、同区におけるニュータウンの多さを挙げている（小久保（高橋）、2015）。

設営の準備、どんと祭実施案内のポスターおよび横断幕の掲示などを組織内で分担して行い、当日に備える。

会場設営は主に1月14日の午前中に行う。持ち込まれた正月飾りおよび縁起物類に点火する「点火式」は夕刻に行われる。点火式の際にはU寺住職・副住職による修祓（読経）があり、その後U寺住職およびどんと祭運営組織の代表者等数名で持ち込み物に点火する。消火は20時頃であり、その間連続して会場内には正月飾り類が持ち込まれる。

毎年、地区内の空手クラブによる演舞が会場内で行われている。以前は泉区内で活動する和太鼓サークルによる和太鼓の演奏も行われていたことがあった。詳しくは後述するが、近年新たにどんと祭の演目として「巫女踊り」が加わるようになった。

### (3) 山の寺秋葉神社どんと祭の沿革

1974（昭和49）年1月までは、U寺ではどんと祭を行っていなかった。一方でその当時、既に向陽台地区においては正月飾りを如何に処分するかが住民共通の課題として意識されるようになっていた。というのも当時は向陽台地区の近隣においてどんと祭は開催されていなかったからである。さらに向陽台地区は「松焚祭」が行われる大崎八幡宮からも15km程の距離がある。公共交通機関が路線バスに限られ、しかも当日は厳冬期の夕刻から夜間にかけて、交通規制などもある中を乗り換えも含めた移動が必要であることから、向陽台地区から大崎八幡宮への移動コストが高いことも当時の住民たちにとっては悩みの種であった。そこで1970年代の向陽台地区では、地区内の空き地を会場として住民たちのみで「どんと祭」として正月飾りをまとめて燃やすということも行われていた<sup>6</sup>。

U寺の敷地内に1月中旬になると正月飾りが放置されるようになっていったのもこの頃である。「遠い」どんと祭の会場には出かけ（られ）ず近所の空き地で行われている「どんと祭」にも出かけ（られ）ず、とは言え正月飾りを家庭ゴミとして処分することには多かれ少なかれ違和感・抵抗感を持つ層が当時のニュータウンの住民の中におり、彼等彼女等がU寺の敷地内に外した正月飾りを放置するようになったのであろう。そのような中、向陽台地区の住民と当

---

6 ほぼ同時期に山の寺地域でも住民有志で「どんと祭」と称して正月飾りを空き地でまとめて焼却することをしていたそうである。

時のU寺の住職とで互いの「正月飾り処分事情」を知るに及び、U寺を会場として向陽台地区の住民が主催するどんと祭が開催されることとなった。つまり、正月飾りを「どんと祭」という形で処分するための場所と機会の乏しさに悩むニュータウン住民と無断で敷地内に放置される正月飾りの処分に頭を痛めるU寺、更に言えば人手はあるが場所のないニュータウン住民と場所はあるものの人手の乏しいU寺とのいわば利害が一致することとなり、ここに今日にまで至るニュータウンの住民が主催しU寺を会場とするどんと祭が誕生するに至った次第である。

## 5. どんと祭運営組織における新たな試みの始まり

### (1) 運営組織の再編

U寺を会場として実施されるようになったどんと祭は、創設当初は向陽台地区の住民たちのみ運営されていた。ここに間も無く山の寺地区も加わるようになる。そして両地区を包摂するどんと祭運営組織として「山の寺秋葉神社どんと祭協賛会（以下協賛会）」が組織されたのが1976（昭和51）年11月である。その後平成になってから後に新たに造成された明石南地区も協賛会に加わり、総勢70名前後のメンバーが協賛会として毎年のどんと祭運営に携わるようになった。

しかしその一方で、協賛会においてはメンバーの高齢化、特定のメンバーへの負担の集中といった諸問題が表面化してくるようになった。

山の寺秋葉神社どんと祭が大きな転換点を迎えたのは2010（平成22）年からである。どんと祭開催36年目となったこの年よりどんと祭の運営組織の再編の計画が具体化してゆく。運営組織の再編計画とは、どんと祭の運営を担ってきたどんと祭協賛会を解散して向陽台・山の寺・明石南の3地区で新たに「どんと祭実行委員会」を組織し、そのうえで実施運営の中心となる「担当地区」を設定し、これを3地区が輪番制で担当するというものであった。とはいえ新体制への移行に伴う混乱も考えられることから、新体制への完全移行は2013年1月からとし、2011年・2012年の両年については移行期間とされた。移行期間の2年間は協賛会体制を継続した状態で「担当地区」を設け、いわば新旧体制の並立状態でどんと祭の運営が行われた。

## (2) どんと祭会場における「見せ物」の追加

運営組織の再編の動きと相前後して、どんと祭当日の会場の模様にも変化が現れた。2011（平成23）年1月のどんと祭より、当日の会場には「秋葉神社」の鳥居が設置され、そして祭が始まった後に「巫女踊り」が行われるようになった。そしてこの年から会場内に設置される行灯も総て作り替えられ、会場内に設置される当日の会場では1回100円の籤引きも行われるようになった。更に2015年1月のどんと祭では竹製の灯籠も会場内に設置されるようになる。

〔樹脂製シート使用の行灯導入および竹灯籠導入〕

山の寺秋葉神社どんと祭においては以前より<sup>7</sup>、会場となるU寺の階段および通路沿い、そしてU寺敷地内への三つの出入口<sup>8</sup>、そしてどんと祭を行う場所であるU寺敷地内の駐車場の出入口に行灯を立てていた。光源は行灯の中に設置された蠟燭であり、日没後には蠟燭に点火される。行灯は小型の「階段・通路用」と大型の「出入口用」の2種類ある。階段・通路用の小型行灯は数メートル間隔で設置され、出入口用の大型行灯は、U寺敷地内への出入口には各1基、敷地内の駐車場への出入口には2基設置される。

2010年1月まで、山の寺秋葉神社どんと祭においては、本体部分に和紙が張られた行灯を使用していた。これを総て同年12月中に和紙から樹脂製のシートに張り替え、2011年1月のどんと祭以降は樹脂製シートが張られた行灯を毎年設置するようになる。

行灯の作り替えの理由は、樹脂製シートの耐久性の高さとメンテナンスの負担軽減のためである。従前の紙製の行灯の場合、連続使用のためには定期的なメンテナンスが必要であり、これが運営組織のメンバーにとって負担のひとつとなっていた。そこで和紙から耐久性が高く軽量でもある樹脂製シートへの張り替えの運びとなった。

行灯の作り替えに加え、2015年のどんと祭からは会場内に竹灯籠も設置され

---

7 会場に行灯を設置するようになった時期は詳らかではないが、1986（昭和61）年1月の第12回どんと祭の準備資料においては既に行灯設置についての記述があることから、この頃までには行灯を設置するようになっていたようである。

8 U寺敷地南側に1か所、U寺敷地東側・西側に各1か所。南側出入口は国道4号線仙台バイパスからの出入口であり、車両の通行ができる。東西の出入口はそれぞれ山の寺地区および向陽台地区との境に設けられた出入口であり、車両は通行できない。

るようになった。この竹灯籠は、前年のどんと祭で持ち込まれた門松の竹を一節ごとに切って、その側面に透かし模様を彫りつけたものである。竹の内部に蠟燭を立てて火を灯すと、側面の透かし模様から光が漏れる。これを秋葉神社の神体・三尺坊の像が安置されている、U寺庫裏の南側に至るまでの通路沿いに初めて設置したのが2015年のどんと祭であった。

#### 〔鳥居・籤の導入〕

2011年のどんと祭から会場内に設置されるようになった鳥居は、運営組織のメンバーの一人であるn s（仮名）氏が自作した。高さ2メートル、幅1.5メートル程度の合板製の赤い鳥居である。2011年のどんと祭では鳥居は「神符頒布所」の正面にのみ設置されていたが、2012年からは持ち込み物を焼却するスペースの正面にも設置され「干支籤」として籤を鳥居の下部に設置された十二支分の12杯の引き出しから取り出せるようになった。

鳥居を造り、会場内に設置することにした理由は「その方がお正月らしいし、盛り上がると思うから」（n s氏）とのことである。それまでのどんと祭では取り入れられてはいなかった籤や、その籤を結ぶスペース、そして「干支籤の引き出し」の導入についても同様の理由が挙げられている。

#### 〔巫女踊り上演とDVD上映の導入〕

山の寺秋葉神社どんと祭では従前より会場内で破魔矢・神符・干支土鈴などの縁起物を頒布していた。これらの頒布は毎年、向陽台地区に居住する女子中学生3名が巫女の装束を着けて行っていた。彼女たちのどんと祭当日の会場の役割は2010年1月のどんと祭までは縁起物の頒布のみであったが、2011年のどんと祭からはこれに、「神事らしい雰囲気になるし、みんな、友だちとか、近所の子とかが巫女さんの格好をして踊るところ見ると盛り上がると思うから」（n s氏）として、「点火式」の際の火種運び、そして先述の「巫女踊り」が加わった。

巫女踊りの際には、3人の巫女が各自左手に鈴、右手に扇を持つ。「踊り」とは言っても全身を大きく動かす舞踊の形は取らず、巫女役の所作は打ち鳴らされる小太鼓のリズムに合わせて鈴を鳴らしながら歩くのが基本形となっている。巫女踊りも小太鼓も、いずれも単純明快な所作およびリズムとなっており、巫女役の中学生たちは事前に各自の立ち位置や歩行の向きを数回確認したのみで本番を迎える。踊りに先立ち、場内アナウンスによって巫女踊り実施が周知

される。

DVDの上映は会場内に当日設置された大型のモニターを用いて行われる。上映されるDVDは株式会社仙台放送の制作・販売による「懐かしのせんだい・みやぎ映像集 みやぎの祭其ノ壺<sup>9</sup>」で、所収の内容が点火式の直前からどんと祭終了時まで繰り返し上映される。DVD上映が取り入れられたのは「雰囲気が出るし、ふるさとの色々なお祭りを知らない人には知ってもらって、知っている人には改めて思い出してもらうように」(ns氏)という理由からである。

以上のように、近年においては「見せ物」と言い得る様々なパフォーマンスおよび造り物がどんと祭において積極的に取り入れられるようになった。この新たな動きについて、相次ぐ「新企画」の中心となって運営に携わったメンバーの一人は以下のように説明している。

「特定の宗教の行事だとかって言うてる人もたまにいるけど、あくまでもこれは町内の、手作りの行事だからって。本当にになにもかも手作りばっかりなんだけどさ。巫女さんの鈴なんて100均で売ってた泡立器と鈴だよ(笑)。お正月を祝って…っていうのはそもそも日本の伝統だし。でも毎年ずーっと同じだとマンネリ化しちゃうから、色々取り入れてね、みんなで楽しめるように」(ns氏)

ニュータウンの住民たちがイニシアチブをとって主催・運営している祭であり、しかもそれが既成仏教寺院の敷地を会場とし、その寺院の住職が「修祓」を担うという形で運営されている祭であるということから、どんと祭の実施に対して批判的な意見も地域内にはある。その意見に対してはどんと祭を「町内の、手作りの行事」(だから、特定の宗教を信仰する者たちがその宗教の名のもとで行っている行事とは言えない)として位置づけつつ、その正当性(正統性)について「お正月を祝って…っていうのはそもそも日本の伝統」であることを根拠としている。その一方で「マンネリ化」を未然に防ぐため、「みんなで楽しめる」ような様々な造り物等を積極的に取り入れるようにしている、という次第である。

---

9 「其ノ壺」は「正月～春まつり編」とされ、正月行事・小正月行事も収録されている。

## 6. むすびにかえて

どんと祭の特徴の一つとして、多様な価値観を受け入れ、様々な創意工夫を凝らすことが可能であることを挙げることができる。仙台市内の広範囲において開催されるようになったことも、この特徴の所以であろう。とはいえ神事としての祭として執り行われる以上は、相応の「神事らしさ」、相応の完成度に到達しているという評価もまた無視し得ない。このように、多様な価値観を受け入れる余地がある一方、相応の「らしさ」も求められるということは、どんと祭の運営主体に対して不断の緊張を強いるものとしても働いている蓋然性がある。

本稿で紹介した事例ではどんと祭「らしさ」の追求、および来場者の満足感を高めることを目指して、種々の新たな試みをほぼ毎年のようにどんと祭に取り入れていた。巫女踊り然り、鳥居・竹灯籠の制作然り、映像資料の上映然りである。もっともこれらの新たな取り組みは来場者の関心や満足感を高揚させるという機能をのみ果たしている訳ではない。運営組織のメンバーによって「マンネリ化の防止」として表現されたこれらの取り組みは、来場者とともに運営組織内部における祭運営に対する興味・関心の低下を未然に回避しようという試みでもあった。更に言えば、あくまでも住民が中心となる「手作りのどんと祭」言説を名実共に強化して既成宗教との「適切な」距離を保っていることを示し、特定の住民への負担を軽減すると共に運営の担い手たちのどんと祭運営への一定以上の興味・関心を保ち続ける仕掛け作りでもあり、この試みによって、対立・葛藤状態の防止および解消が目指されていることが窺えた。

とはいえ、来場者の興味を喚起し、運営組織の成員の関心を集めるに足るような新たな試みを継続的に編み出してゆく能力は多分に属人性が高いものであり、相応の情報収集や学習等も必要になる。新たな取り組みが加わるに伴う運営上の負担増加の蓋然性もあるだろう。これらのことを鑑みれば、来場者や運営組織の成員に対して祭に対する関心を保たせ続けるための手段を常に考え、取り入れ続けてゆくにあたっても、一定の緊張状態が運営組織内においては継続していると考えられるのである。しかしこの緊張状態が継続していることもまた、どんと祭の存立・継続へと至る新たな試みの揺籃として、機能するものであるだろう。



## 謝辞

「山の寺秋葉神社どんと祭」運営組織の皆様、U寺ご住職様には本稿の執筆にあたり、多大なるご協力を賜りました。改めまして心より御礼申し上げます。

## 文献

有森尚央 (2012) 「岸和田だんじり祭の組織論—祭礼組織の構造と担い手のキャリアパス—」『ソシオロジ』57 (1) (通号第174号) : 21頁-39頁。

安藤直子 (2006) 「どんと祭の現在から見えるもの」 仙台市教育委員会編『仙台市文化財調査報告書第305集 大崎八幡宮の松焚祭と裸参り調査報告書』第4章第2節, 仙台市教育委員会 : 90頁-101頁。

小久保 (高橋) 嘉代 (2015) 「参拝者数と実施件数からみた近年における仙台市の『どんと祭』の特徴」『青森大学附属総合研究所紀要』vol.16 (No. 2) : 36頁-48頁。

松平誠 (1990) 『都市祝祭の社会学』有斐閣。

高橋嘉代 (2012) 「廃止どんと祭からみるいわゆる「コミュニティ祭」の課題：宮城県仙台市の事例から」『文化』(東北大学文学会) 75 (3・4) = 396・397 : 2012. 秋・冬 : 285頁-265頁。

山の寺秋葉神社どんと祭協賛会 (2008) 「平成21年 (第35回) 山の寺秋葉神社どんと祭協賛会」非公刊。

## A Study about backgrounds of innovation in the festival operation organization of the new community

Kayo TAKAHASHI

In this thesis, the author investigated how a conflict was canceled in the operation organization of the festival. It's the operation organization of the festival called "*Donto-Sai*" to make the subject of an analysis by this thesis.

This festival is widely held in the Miyagi Prefecture Sendai city.

This festival is performed as a festival in a shrine at a shrine as the event site in many cases. Exceptionally, there is also a festival residents manage in a park and a vacant lot. In particular, opposition by the difference in the ideas between the resident about a festival tends to show in such case.

The operation organization introduced a new management solution and a new performance by the case an author watched. And it was revealed that the operation organization avoided opposition between the resident by these tries.